



Title	ハンムラビ紀年を廻る最近の研究
Author(s)	板倉, 勝正
Citation	北海道大學文學部紀要, 4, 95-106
Issue Date	1955
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33226">http://hdl.handle.net/2115/33226</a>
Type	bulletin (article)
File Information	4_P95-106.pdf



[Instructions for use](#)

ハンムラピ紀年を廻る最近の研究

板  
倉  
勝  
正

# ハンムラビ紀年を廻る最近の研究

板 倉 勝 正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の發達によつてその上限が引下げられ且著しくその確實性を増したこと、二つには新史料の發見とそれに基づく旧史料の再検討によつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたこと、

くに抛る。特にマリMari文書の發見とコルサバッド王名表 Chorsabad Listの發表とは、バビロン第一王朝の年代をほぼ二世紀引下げ、これによつて嘗つてオリエントを通じて認められた不可解な空白(アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を缺き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた)は実は存在しなかつたことが明らかにされた。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題<sup>(\*)</sup>についての研究的メモにすぎない。なお本稿において書名・雜誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の翻字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に從つて敢へて統一しなかつた。<sup>(\*\*)</sup>

- (\*) cf. V. G. Childe : *New Light on the most Ancient East* (1954)
- (\*\*) Th. Jacobsen : *The Sumerian King List* (1939) p. 191.
- (\*\*\*) 本誌 Bibliographie des S. Jacobsen, op. cit.
- A. Moortgat : *Aegypten und Vorderasien* (1951) A. Parrot, *Archéologie Mesopotamienne II* (1953) 等 Bibliographie des A.

北大文学部紀要

[1]

バビロン第一王朝(ハンムラビ王朝)の紀年は<sup>(1)</sup>バビロニヤ・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、又バビロニヤ紀年の骨格をなす王名表Aがこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。従つてこの王朝の紀年が確定されば、<sup>(2)</sup>これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代<sup>(4)</sup>を確定することであるが、これは確實な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸権威が一致して認めるものはアッシリヤの *Innu list*に見える Assur-Dan 三世の 763 B.C.の皆既日蝕のみである。<sup>(5)</sup>第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれる Sequence datingであるが、これは単に先後關係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない。<sup>(6)</sup>最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、<sup>(7)</sup>年名表、<sup>(8)</sup>リンムッ表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

	A	B	C
Ur III	c. 2290—c. 2183	2281—2170	2328—2220
Babylon I	c. 2050—c. 1750	2057—1758	2105—1806
Hammurapi		1955—1913	2003—1961

A) Th. J. Meek : Haverford Symposium on Archaeology and The

Bible (1939) 159

B) A. Ungnad : Subartu (1936) 36

C) L. Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique (1939) chap II

Tableau chronologique

(2) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) が年表を綜合して  
再編した代表的研究である。

(3) E. Meyer : Geschichte des Altertums I. 2. §§ 325f. ders. *Ältere  
Chronologie Babylonians, Assyriens und Aegyptens.*

(4) 従来最も最古の確定年代とされたエジプト太陽暦の採用 (4236 B. C. E.  
Meyer : *Chronologie*. 45) の最近の研究による疑問視せられるに至った (A.  
Scharff. "Bedeutungslosigkeit d. sog. ältesten Datums usw." *Historische  
Zeitschrift* 1940) 及び H. Bengtson : Einführung in die alte Geschichte  
(1949) 24. ann. 1.

(5) A. Ungnad : "Eponymen" (Reallexikon d. Assyriologie II.) 415,  
422, 430, 432 及び H. R. Hall : *Ancient History of the Near East*  
(1932) 15-16 Cambridge Ancient History Vol. I. 149.

*Geschichte des Altertums*. I. 2. § 432 a. etc. 「Bur-sagal の limmu  
職 (Assur. Dan の在位第九年) にあつた年「マシトール市の叛乱」ニマン  
の月の日蝕」である。即ち同年六月十五日「ニネヴェ」から見えた皆既日蝕であ  
る。

limmu とはキムシヤの Archon ロート<sup>(6)</sup>の consul の如き一年交代の重要  
官職であり「マシトール」における年代は殆んど limmu 名の記載があり、  
この制度は *Kittipe* 文書 (ウル第三王朝) 以来引続を行はれてゐる。

(6) 最近の R. C. の精密度が更に高められれば、紀年学は根本的に革新され  
るのであるが現在の処まだ試験的段階に止る (F. E. Zeuner : *Dating the  
Past* (1951) chap X B Appendix 415 ff.

(7) 重要事件を以て年名とせしむることはエジプト朝から始まる Thureau  
Dangin : *Sumerische u. akkad. Königs in schriften*. 225 ff.) 年表を

編纂し扱ひたすのは A. Ungnad : "Datenlisten" (Reallexikon der  
Assyriologie II 131-184) とエジプト第一王朝時代の集成は M. Schorr :  
*Urkunden des altbabylonischen Zivil- u. Prozessrechts* 582-614.

(8) 従来紀年の基礎として E. Meyer. op. cit. S. Smith. *Early  
History of Assyria* (1927) Appendix : *Chronology*. pp. 343-365. 397-  
369. S. A. Cook : *Chronology* (C. A. H. I. pp. 145-156)

この中最も確実なものはエジプトの lintms 表であり、現存ものは  
Adad-nirari II (911-890B.C.) の Assur-ban-apli (669-625B.C.) に及んで  
その下限は有名な Ptolemaios の Kanon と接続して更に確実性を増し  
うる。

II

若し確実な天文学的記録が存在し、その計算が一致を見るならば歴史  
家は最早絶対年代の確定について口を挟む余地はない。そこでまず天文  
学から始める。

歴史学の側から提出された最近の紀年の変化に依じて、嘗て見捨て  
られた Ammizadugga の金星観測記録の天文学的再検討が採り上げら  
れるに至つた。(9) これは Assur-ban-apli の図書館出土の断簡と Ammiz-  
adugga の第六年における金星のあやむ (Helical Rising) の記録であ  
るが、諸権威の間の計算の結果が全く一致せず、かつ遙か後代の筆写で  
あるために久しく省みられなかつたものである。(10)

バビロン第一王朝の王名、父子関係、治世年数はすべて分つてゐるか  
(11) の絶対年代が分れば全王朝のそれも亦確定する筈である。O. Ne-  
ugebauer は S. Smith の紀年に対する批判において、ハンムラビ即位の  
年は天文学的に 1856, 1848, 1792, 1736 B. C. の三つしかの中間と  
した。(12) 然るに M. B. Rowton はこれ(13) の同じ年を 1792, 1728, 17  
36, 1664 B. C. の四つ(14) の可能性があると云ふ。(15) これらの Variation は金

# ハンムラビ紀年を廻る最近の研究

板倉勝正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の発達によつてその上限が引下げられ且著しくその確実性を増したこと<sup>(\*)</sup>、二つには新史料の発見とそれに基づく旧史料の再検討によつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたこと<sup>(\*\*)</sup>に拠る。特にマリ Mari 文書の発見とコルサバッド王名表 Chorsabad List の発表とは、バビロン第一王朝の年代をほぼ二世紀引下げ、これによつて嘗つてオリエントを通じて認められた不可解な空白(アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を缺き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた)は実は存在しなかつたことが明らかになった。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題<sup>(\*\*\*)</sup>についての研究的メモにすぎない。なお本稿において書名・雑誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の翻字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に從つて敢へて統一しなかつた<sup>(\*\*\*\*)</sup>。

(\*) cf. V. G. Child: *New Light on the most Ancient East* (1954)

(\*\*) Th. Jacobsen: *The Sumerian King List* (1939) p. 191.

(\*\*\*) 名 Bibliographie 201515 Jacobsen, op. cit.

A. Moortgat: *Aegypten und Vorderasien* (1951) A. Parrot, *Archéologie Mesopotamienne II* (1953) 等 Bibliographie 201516.

北大文学部紀要

[I]

バビロン第一王朝(ハンムラビ王朝)の紀年<sup>(1)</sup>はバビロニヤ・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、又バビロニヤ紀年の骨格をなす王名表 A がこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。従つてこの王朝の紀年が確定されれば、これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代<sup>(2)</sup>を確定することであるが、これは確実な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸権威が一致して認めるものはアッシリヤの *Innu list* に見える Assur-Dan 三世の 763 B.C. の皆既日蝕のみである<sup>(3)</sup>。第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれる Sequence dating であるが、これは単に先後関係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない<sup>(4)</sup>。最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、年名表、リンムッ表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

	A	B	C
Ur III	c. 2290—c. 2183	2281—2170	2328—2220
Babylon I	c. 2050—c. 1750	2057—1758	2105—1806
Hammurabi		1955—1913	2003—1961

【III】

一九三五年 A. Parrot の指揮するフランス発掘隊はエウフラテス中流の古都 Mari の遺跡 (Tel Hariri) を発見し、その王宮図書館から多数の重要文書を発掘した。(1) Thureau-Dangin は直ちにこれを解説しその重要な一部を発表して学界の注目を浴びた。(2) これらについてマシリアの Shamsi-Adad 一世は Mari の王 Jahdun-Lim と同時代であり、また Jahdun-Lim の子 Zimri-Lim は有名なハンムトラビと同時代であることが明かされた。(3) 即ちマシリアの Shamsi-Adad I は一時 Mari を征服してその子 Jasmah-Adad をその王としたが、Shamsi-Adad の死後旧王朝が再び主権を恢復して Zimri-Lim が王位に即つたのであつたことを表示すれば次の如くなる。

Assur	Mari	Babylon
Ilakabkabu	Igit-Lim	
Shamsi-Adad I	Jahdun-Lim	Sin-muballit
Ishme-Dagan I	Jasmah-Adad (Shamsi-Adadの子)	Hammurabi
	Zimri-Lim (Jahdun-Limの子)	

即ち Shamsi-Adad I は従来考へられた如くハンムトラビの死後数十年にして即位したのではなく、ハンムトラビ即位以前にすでに強大な君主だったのである。(4)

この両者の關係についての明確な証拠はなからず、Zimri-Lim がマシリア支配を顧慮して即位したのは明らかに Shamsi-Adad I の死後であり、又年名表によれば Zimri-Lim は三十二年間統治した後ハンムトラビに亡されてゐるから、この年が一般に考へられてゐる様にハンムトラビ

の即位三十四年とすれば、ハンムトラビの即位と Zimri-Lim の復位 (Shamsi-Adad の死後) との間は僅かに二年にすぎない。して見るとこの両者の間に生前に何等かの關係があつたとは考へられず、前者の死の直後に後者が即位したと見るのが妥當であらう。それでは次に Shamsi-Adad の在位年代についてマシリア側の史料によつて検してみよう。

Shamsi-Adad I はマシリアの最初の強大をなした英主であるの(5) 後代の諸王がしばしばこれについて言及してゐる。例へば Shalmanaser I (前十二世紀前半) はマシリア神殿の再建碑文(6) におつて Shamsi-Adad I の再建を 580 年前に、Erishum I より再建を更にその(7) 159 年前とつづる。また Essarhaddon (前七世紀前半) によれば、この(8) 同じ期間をそれぞれ 434 年および 126 年とつづる。両者の差は 179 年であり、前者に從へば Shamsi-Adad I は 1860 B. C. 後者に從へば 1714 B. C. となる。この場合時代の近い前者の方がより正確であるといふのは常識的に考へられる処であるし、その典拠となつた史料も後者の場合は五百年の間に前者の利用し得たものよりは遙かに減少してゐたことは明かである。然るにホルサバット史料の発見はむしろその逆の証拠を提供してゐる様に見えぬ。

(1) Archives Royales de Mari (AMR) I. G. Dossin : Correspondance de Shamsi-Adad (1946) II. Ch.-F. Jean : Lettres diverses (1941) III. J.-R. Kupper : Correspondance de Kibri-Dagan (1948) G. Goossens :

Classment des Archives Royales de Mari (R. A. 1952)

(2) Thureau-Dangin : Jasmah-Adad (R. A. 1937)

(3) J. R. Kupper : Nouvelles Lettres de Mari relatives a Hammurabi (R. A. 1948) 及び AMR II no. 18.

(4) AMR I no. 3 の新譯文に「Igit-Lim は Ilakabkabu を罪を犯せる故に

母は Iakabukab を迎けたがらう Iahdunlim の國を征服せしむ」と見え  
 る(前掲參看)。なほ L. Oppenheim : The Archives of the Palace of  
 Mari (J. N. E. S. 1950) 130 頁を參。又更に古く時代を定むるシムリタの  
 ヲヨロリヤ侵略は Shamsi-Adad より約十代前の Ilushuma の碑文に「……  
 カレノイナブーネ……と自由を獲たガヨシヤ々」と見え( C. J. Gadd : History  
 and Monuments of Ur (1929) 158. )

(5) S. Smith : Early History of Assyria 170-1. Table 4. 田ノ Weidner  
 氏曰く二十六年に於て此の國を占むる迄に於て Hammurapi (1955-191  
 3) Shamsi-Adad I (1892-1860) ヲヨリて。 E. F. Weidner : Zeitschrift  
 (bei B. Meissner : König Babylonien und Assyriens)

(6) Weidner 氏 Thureau-Dangin の解釋論を以てして "Der Synchronism-  
 us ist dort einwandfrei bewiesen" とす( A. f. O. (1938) 198.  
 Ann. 21 ] 但し Jacobsen は前二十紀前半に於けるシムリタの歴史に於て  
 Synchronism を信用せざる。 Sumerian King List (1939) 193.

(7) Ishme-Dagan が父の死を以てて Mari の王 Jasmah-Adad となし  
 手統がなる。 J. R. Kupper. (R. A. 1948) 從つて Shamsi-Adad I の死  
 はシムリタの Mari 征服以前に於けるべきなる。

(8) Rowton : Tuppū etc J. A. O. S. (1951) p 202 (n) 73  
 (9) シムリタの年名表に Mari を改めた記事の記述は三十三年と三十  
 五年の二つに於て「Mari の城壁を破壊した年」と記述する。

[Ungnad : Datenlisten. nr. 135, 137. (R. L. A. II. s. 180-181)] 年名は  
 前年の最大事件を以てて名付ける習慣があつたとすればこれは治世三十四年に  
 至る。

(10) シムリタは法典の序文にシムリタルの王がニネツエを支配したことを  
 記述する。(Col. IV. l. 55. 頁及び l. 60) 更に Larsa の知事 Sin-iddin-nam  
 に与つた命令書にシムリタルの駐屯の軍隊を助けた本國に於ける王の  
 命を以て (L. W. King : Letters and Inscriptions of Hammurabi vol-  
 III no. 1 A. Ungnad : Babylonische Briefe. nr. 40) 且つ彼のシムリタル  
 支配を証立する。かうした事實は Shamsi-Adad I が強大な君主として

存在すべき時期には考へられず、從つてシムリタルの強大をなしたのはその  
 死後であるとの推定を裏付ける。なほ B. Meissner : Könige Babylonien  
 u. Assyriens. 95. 頁を參。

従来より文書に Rim-Sin, Hammurapi, Zimri-Lim などと同時代である事  
 が確定されている Eshnunna の王 Ibal-pi-el の年代不明の年名に「Shamsi-  
 Adad の殺した年」と見え( E. Ebeling : "Daten von Aschjatly" (R. L.  
 A. II, 195.) A. Ungnad : Eine neue Grundlage für die alorientalische  
 Chronologie (A. f. O. (1940) 145.) なほ Sippar 出土の法律文書に於て  
 シムリタルの即位十年に Shamsi-Adad は未だ在位してゐた証拠がある。

「Marduk...Hammurapi 及び Shamsi-Adad の死に對して「[その  
 如く誓約せよ]...Malgun の讒言に於てシムリタルの死」(Kohler-Ungnad :  
 H. G. III nr. 710. Schorr : Urkunden nr. 284) の年名にシムリタルの年名  
 を檢するに於て即位十年に至る (Ungnad : Datenlisten (R. L. A. II. 178  
 nr. 112))

なほ Assur A 表に於て Shamsi-Adad I の死をシムリタルの王  
 名は左の如くである。[ ] の注 (c) の表を參照せよ。

Puzur-Ashur I
Shalim-akhum
Ilushuma (a)
Irishum I
Ikunum
Sharrukin I
Puzur-Ashur II
Akhi-Ashur
Rim-Sin (b)
Irishum II
[Assur]
[Izkur-sin]
[Irishum III]
Shamsi-Adad I.
Ishme-Dagan I.

(a) これがシムリタル第一王朝の始祖ヌムンと同時代人なることと L. W.  
 King : Chronides concerning the early Babylonian Kings. II. 14 頁に  
 S. Smith : Early History of Assyria. Chronological Table 4. 頁及び  
 Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique. Tableau chronologique を參。  
 (b) 年代表に Larsa の Rim-Sin といふ年名に B. Meissner :  
 Könige Babylonien und Assyriens. 291. Ann. 4 頁及び S. Smith : E.

H. A. 183-4を見よ。マッシュリヤの王名は特徴的な形をもち、これは数名の王名を各乘リ<sup>(1)</sup> (例へば Adad-nirari を称するものは六人 Shamsi-Adad は五人 Tigrat-pileser は三人) マッシュリヤの王名と合致するものは殆んどなく (Sharrukin, Ishme-Dagan は稀な例外)。Rim-Sin の名はマッシュリヤ史を通じての場合一回であることはこの傍証となすに足りる。但し Khorsabad List ではこれを缺く。Ⅳの注(4)の表参照)

- (1) A. Moorfgat : Vorderasien 291 f. S. Smith : Early History of Assyria. 197 ff.
- (2) Keilschrifttexte aus Assur historischen Inhalts, nr. 13.
- (3) *ibid* nr. 51. 126.
- (4) Meyer : Chronologie 16-17. Hall : Ancient History 28-29. Parrot. *op. cit.* 363-5. Jacobsen ; *op. cit.* 192-3.

Ⅳ

これはシカゴ大学の東洋研究所が、1932/33のシーズンに Khorsabad (Dur-sharrukin) から発掘し、当時の所長故 J. H. Breasted が A. Poebel に翻譯出版を委嘱したもので長くその発表が期待されてきたが十年後に漸くその約を果したものである。極めて良く保存された総七・二五五、横五・二五時のタブレットで、最古の Tudia の Assur-nirari V に到る百七人の王名が父子関係および統治年数その他と共に誌され、<sup>(2)</sup> 居り、その跋文に「アルヒラの神殿書記 Kandiani がマッシュリヤ総督 Adad-EN-GIN の第二 Himmu の月の二〇日、マッシュリヤ市の王名表に抛り書写した」事が誌されている。この日付は Himmu list によれば Tukulti-apil-Esharra III (王名表は百八代) の治世第七年である (738 B. C.)、これは従来知られてきた Assur A 4444 B 2222 2222 2222 2222 Poebel は Assur A の複本では 6666 I 2222 Assur-

nadin-ahhe の二代の統治年数が缺けてゐる。Assur A の不一致が問題を一層複雑化した。この重要な (39) Shamsi-Adad I の年代に關して種々の異論が生ずるに至つた。即ちキヌメの校訂者 Poebel は 1726-1694 B. C. として Albright は二代の間隙に二十二年を添へて 1748-1716 として Smith は依然後代のマッシュリヤ王の碑文によつて 1820—40の線を堅持してゐる。然し缺文は別として Assur A の Chorsabad Lis の何れを採用すべきか、或ひは後代のマッシュリヤ碑文の信憑度など問題も又ある。

- (1) The Assyrian King List from Khorsabad (J. N. E. S. 1942—1943, 及び E. Cavagnac : Les Listes de Khorsabad (R. A. 1945-6) A. Parrot. *Archéologie Mesopotamienne* (1953) 347-365.
- (2) これは大きく四つのグループに分けられ、第一は Tudia より Apishal に到る十七代で「ラントに住んでゐた(遊牧の意か?)」と注されて居り、そのうち十五代までは従来全く知られなかつた名前である。父子関係・統治年数を缺く。第二は第二十六代に到る十五代父子関係が誌してあり、第三は三十二代 Iushuma に到る六人父子関係・統治年数を缺く。Poebel は三十三代 Erišum I に始る第四のグループ(父子関係・統治年数が完備する)から Himmu list が始まることを推定してゐる。
- (3) Assur A は Khorsabad List の九十七代 Tigratpileser II までを誌してゐるが、その次代 Assur-Dan II の治世のものがあつて、B は断簡であるが更に六、七代古くと考へられてゐる。
- (4) Parrot, *op. cit.* 352. その相違の箇所を表示すれば次頁の表の如くなる。
- (5) J. N. E. S. (1942) 293. 及び G. Dossin がこれを支持する Correspondance de Shamsi-Adad I. (1726-1694 a. J.-C.) [Bulletin de la Classe des Lettres, Academie royale de Belgique, 1948. 59-70 (未完)]
- (6) Bibliotheca Orientalis (1948) 125. 及び Rowton も前掲論文(Ⅱ注(6))に於てこれを支持してゐる。Rowton 論文によつては三等宮の紹介



Chorsabad (a)	Assur A (b)
30) Puzur-Ashur I	(1) Erishu I
31) Shalim-Akhum	(2) Ikunum
32) Ilushuma	(3) Sharrukin
33) Erishu (I)	(4) Puzur-Ashur
34) Ikunum	(5) Ahi-Assur
35) Sharrukin I	(6) Rim-Sin
36) Puzur-Ashur II	(7) Erishu II
37) Naram-Sin	(8) [ ] Assur
38) Erishu II	(9) Izkur-Sin
39) Shamsi Adad I	(10) Erishu III
40) Ishime-Dagan I	

a) A. Poebel : The Assyrian King List from Khorsabad (Journal of Near Eastern Studies, 1942.)

E. Cavagnac : Les Listes de Khorsabad (Revue d'Assyriologie, 1945-6)

b) E. F. Weidner : Die grosse Königsliste aus Assur [Archiv für Orientforschung (1927)]

がある(史学雑誌第61巻第12号)。

(7) Alalakk and Chronology (1940) A. J. A (1945)

(8) 註 (11) (12) (13) (14) 勿論後代の筆写・逆算に拠る記録の多くは信憑性を乏しきもの。例へば新バビロニアのナボニドスはアッカドのサルマンセリム三王以前(即ち3750 B. C.)と計算し(L. W. King : History of Sumar and Akkad 61.)<sup>6)</sup>、アムルナヤはアムルナヤ以前(即ち2225 B. C.)と計算し、L. W. King : History of Babylon, 110, 111) これを基として過大である。

北大文学部紀要

[V]

シリア考古学の発達によつてオリエントの比較層位的研究がエジプト・メソポタミアから更にクルタにまで拡大され、この広大な地域に渉る比較研究が確立されつゝあるのは第二次大戦後の注目すべき事実である。<sup>7)</sup>

S. Smith は北シリアの Alalakk (tel Archanana) の発掘に基いて次の如き重要な事実を明かにした。<sup>8)</sup> 即ち Ugarit (Ras Shamra) の層位的研究に拠れば、メソポタミアの影響が現はれるのはエジプト第十二王朝のシリア撤退 (c. 1800 B. C.) 以後であり、従つてハンムラビのシリア支配は当然それ以後と想定され、これは Alalakk の結果と一致する(左表)。<sup>9)</sup> Alalakk の発掘者 L. Woolley も強くこれを支持してゐる。<sup>10)</sup>

Level VIII	第十二王朝期
Level VII	Yamkhad の宮殿 (ハンムラビ時代) <sup>6)</sup>
Level VI	Megiddo X, IX <sup>6)</sup> Murshilish I の攻略 <sup>7)</sup>
Level V	Thutmes III の攻略 (1468)

更に Smith は南シリアの Messara 平原の Tholos B 出土のシリア  
ロン第一王朝時代のシリンドラーが、エジプト第二中間期 Second Inter-

mediate Period に属する甲戌おちの中期の第一層 (M. M. Ia) の十層と半田先生の自説の High Chronology (即ちハムラビを 1792-1750 B. C. とする) の証拠としてあげた Albright と Tholos B の年代を遂かに計算して 1750-1725 B. C. とする。これは自説の Low Chronology (ハムラビを 1728-1686) に有利な証拠と考へる。

Albright は更に Zimri-Lim が黄金の海を渡つた Byblos 王 Iu-an-tin-hamu をエホロツリンに見えぬ n-ta と同一人物であると主張して、ハムラビ第十三王朝の Nefertep (Albright はこれを 1741-1780 B. C.) に仕けた Byblos 王に代つて 1740-1720 B. C. の第一層の従つてハムラビの三十一世 (Albright はこれを 1697 B. C.) に代つた Zimri-Lim (1730-1700) の同時代人として、これを合致させる。High Chronology を採る時は両者の間に半世紀の隔りを生じ事実を合致せしめざる。

然しこの両者が同一人であるか否かは先づ問題であり、次にエジプト第十三王朝の紀年については未だ確定的な意見の一致は見られぬ。<sup>(27)</sup>更に前十七世紀以前の中期のノスの層位については、ハムラビの考へるよりも論争が多く、この場合稍々水掛論の嫌ひがなくてはなぬ。<sup>(28)</sup>

- (一) H. J. Kantor : The Aegean and the Orient in the Second Millennium B. C. (1947) 及び G. Vercouter の著書 L' Egée et l' Orient au Deuxième Millénaire av. J.-C. [J. N. E. S. (1951) 205 ff]
- (二) Alalakk and the Chronology (1941) Parrot : 391-394.
- (三) フォン・エッケハルトのミナオ文明の歴史を著した著者から Cf. M. B. Rowton : Tuppū and the Date of Hammurabi J. N. E. S. (1951) P. 203 S. Smith. op. cit. 15.
- (四) L. Woolley : A Forgotten Kingdom (1953) 193.

VIII	第十二王朝期 (1900-1780)
VII	Abban 王朝 (ハムラビ・リム・シン時代) (1780-1750)
VI	(1750-1595) Murshilish I の攻略 (1595)
V	A] (1595-1527)
	B] (1527-1447) Thutmes III の攻略 (1483)

- (5) Smith. 8.
- (6) " 9.
- (7) " 36.
- (8) Middle Minoan I - II and the Babylonian Chronology. A. J. A (1945)
- (9) Bibliotheca Orientalis (1949) 126.
- (10) B. A. S.O. R. 99. (1949) 9-18 A. Parrot. op. cit. 388-389. B. M. Rowton : op. cit. 203. (n) 77.
- (11) H. E. Winlock : The Rise and Fall of the Middle Kingdom in Thebes (1947) 及び第十二王朝の紀年の天文学的研究として O. Neugebauer. op. cit. 60, 61 を参照。
- (12) R. W. Hutchinson : Notes on Minoan Chronology (Antiquity. 1948)
- (13) ミナオ文明の歴史を著した著者から Cf. M. B. Rowton : Tuppū and the Date of Hammurabi J. N. E. S. (1951) P. 203 S. Smith. op. cit. 15.
- (14) L. Woolley : A Forgotten Kingdom (1953) 193.

バビロン第一王朝が第十一代 Samsuditana の時ヒッタイトの Mursish 一世の急襲によつて亡び、以後バビロニア史が大きく転廻し「山岳民族」争覇の舞台となつたことは広く認められてゐる。<sup>(1)</sup>このバビロン王朝の終末を劃する重要な年代は諸家によつて色々な推算がなされてゐるが、A. Goetze は最近 Shuppluliumash 大王（前十四世前半）の年代からの逆算によつて重大な手掛りを提供した。<sup>(2)</sup>

従来はバビロン第一王朝の終末を (Mursish の入寇) c. 1800 B. C. に置いたため、後のアマルナ時代におけるハツチ興隆期との間に大きな間隙が考へられ、前十九世紀前後の古王国、前十四・五世紀の新王国の二つの時期が想定されてゐた。然るにマリ文書およびコルサバド・リストの発見によつてハツチ史の上限が著しく引下げられた結果この間の間隙は消滅するに到つたが、然もその下限はトトメス三世のシリヤ征服記録やアマルナ文書によつて確定してゐる以上、これより逆算すればその上限には自ら限界がなければならぬ。

先づ Götze はムルシルのバビロン荒掠に於いての代表的紀年として Thureau-Dangin (1650 B. C.) Ungnad - Smith (1595 B. C.) Albright (1531 B. C.) Weidner-Böhl (c. 1500 B. C.) の四つを挙げ、これがハツチ史に適合するか否かを検討してゐる。ハツチ史初期の王統は頗る混乱してゐてバビロニア・アッシリヤの如き採るべき史料が少いが、彼はボガツケイ出土のヒエログリフで書かれた Nisantas 文書によつて Tudhaliyash II 及び Shuppluliumash (Götze によれば 1390-1350 B. C.) に到る四王を父子継承の四代と考へる。Tudhaliyash II がエズパト第十八王朝のトトメス三世 (1485-1450) と同時代人である事は両者の歴史的碑文によつて確定されてゐる。これからムルシル一世までは合計

十一(九)人の王名が知られてゐるが、その内五人については父子関係が分つて居り、又これ以外に二人の王妃が知られてゐるので少く共この間に七代の経過があつたことは確實である。そして Tudhaliyash II の下での所謂「新王国」の勃興はトトメス三世の陵夷以後、即ち 1450 B. C. と考へられる。ムルシル一世はこれより七代前であるから、この間をほぼ二百年と計算することは妥當であり、こゝに 1650 B. C. なる紀年を得る。即ち Thureau-Dangin のものが最もよく条件を満し、次いで A. Ungnad. と S. Smith の 1595 B. C. も亦なほこの範囲に入るが、それより新しい年代は到底考慮の余地がないといふ。

- (1) A-Moortgat. op. cit. 350-351.  
 (2) A. Goetze : The Predecessors of Shuppluliumash of Chatti (Journal of American Oriental Society 1952)  
 (3) L. Delaporte : Le Proche-orient Asiatique, chap. II Du XVIIIe au XV<sup>e</sup> Siècle (p.p. 152-163)  
 (4) Wilson : Burden of Egypt (1951) 年表参照。  
 (5) ハツチでは王妃の位は一代一人の定めであつたので King List と並んで Queen List が頗る重要な地位を占めてゐる。(Götze. op.cit. p. 96 n. 3)

[VII]

以上の如くにしてバビロン第一王朝の紀年は全体として約二世紀引下げられ、所謂暗黒時代と考へられた Gap が消滅した事は大きな収穫である。然しまた同時にこれによつてアマルナ時代直前のオリエント政治史に根本的検討が必要となつたことも亦事實である。大体の傾向はハンムラビの時代を引下げて c. 1800 B. C. 以後に置くこと点においてはほぼ一致してゐるが、これについてもなほ「王名表」に拠る諸学者の側からは理由ある不信が表明され居り、Low Chronology を代表する Alb-

right も瀕々として諸説の訂正を發表してゐる現状を思へば、<sup>(4)</sup> 絶対年代の決定に到るまでには相当の時日を必要とするであらう。従つてウイソンがエジプト史において 2000 B. C. 前後の時代には十年、1500-1000 B. C. についても十年乃至十五年のフレイを認め、モートガルトが<sup>(6)</sup> バビロニア史について前三十年紀には百年単位の、前二千年紀には十年単位のフレイを容認してゐる態度は暫らくは認めなければなるまい。

結局ハンムラビ紀年の問題は「決して議論の余地のない新事実の発見によつてではなく、それ自身としては部分的証拠力しかもたらぬ事実の推積ねによつてのみ解決せられるであらう。」<sup>(7)</sup>

(1) 例へばハンムラビはメソポタミアの完全な支配者である様に考へられて来たが、Mari 文書その他に拠ればその支配権の内容は彼自身が法典序文に誇つてゐる程には絶大なものでなく、シュメル・アツカッド時代の覇者と左程異ならなかつたのではあるまいか。またアナトリア・シリア等に対するハンムラビの支配も或ひは単にウル第三王朝以後形成されて来たバビロニア世界―バビロンをその内の一勢力として、他にイシン・ラルサ・マリ etc を含むところの―全体の影響として見らるべきものではなからうか。マリの王 Niri-Hin のバビロン駐在大使が当時の政治情勢を報告した手紙に「バビロンのハンムラビに従ふもの十一十五王、ラルサのリム・シンに従ふもの同じく十一十五王、これに対して Yamkhad (Alalakk) の Yarim-Lim に従ふ王は二〇人に達する云々」と言つてゐるのは示唆的である (L. Woolley: A Forgotten Kingdom, 67.)

(2) ソガイエトの古代史家ストルーガエも Smith 説 (1792-1750 B. C.) を支持してゐる。La datation de la I<sup>er</sup> dyvastie babylonienne (V. D. I. 1947 1.) [R. A. (1950) 102 による] 但し K. Ploetz は A. Moortgat (op. cit. Zeittafel) と共に Albright 説 (1726-1686 B. C.) を採つてゐる。Auszug aus der Geschichte (1951) 51.

(3) Th. Jacobsen : The Sumerian King List 191-194, 193. n. 6 a.

(4) W. F. Albright : The Chronology of King Hamurapi (Bibliotheca Orientalis 1948.) 彼は 1942 年に三回目の訂正を試み (A Third Revision of the early chronology of Western Asia) 1952 年に 1938 年の最初の論文 (A Revolution in the Chronology of Ancient Western Asia) 以来七回目の訂正を出してゐる (Further Observations on the Chronology of the early Second M. B. C. [未見])

(5) J. A. Wilson : The Burden of Egypt. (1951) vii.

(6) A. Moortgat : Aegypten u. Vorderasien. (1950) 315.

(7) M. B. Rowton : op. cit. 203.